



看護部通信

2019年 3月



春とともに別れの季節がやってきます。同時に新しい元号の発表が近づき、新たな時代が始まる予感がします。定年退職を迎える看護部職員から、職場へ感謝を込めて思い出をつづりました。

<看護管理室>



S・H

病院看護師となって39年、リハセンには13年間お世話になりました。赴任当初リハビリテーション病棟に配属され、社会復帰に向けて一生懸命取り組む患者さんと接することで沢山のことを教えてもらいました。多職種が協働して患者さんとその家族を支える医療に関わり、成長することができました。これからも県民に愛される病院としてさらに発展してくれることと思います。

心に残る思い出のひとつは、リハセン周辺の素晴らしい自然です。早朝の駐車場から見える山々と徐々に登ってくる朝日、帰りの黄昏時の乳白色の空。思わず立ち止まることが何度もありました。「なんだか頑張れる」元気をもらいました。これからも応援しています。



A・S

平成7年リハセンに入職、早23年が過ぎました。

看護師を志したのは、一つ目は幼少時に自分自身が大病を患ったこと。二つ目は父親が生死をさまよう程の怪我をしたことで、病院で感じた雰囲気、医師や看護師の優しさに触れたことがきっかけでした。共に看護を語り合った学生時代の友人、新卒で働いた病院の先輩看護師の温かい指導、リハセンでは色々な面で応援してくれた仲間がいたから“定年”まで働き続けられたと感じています。看護部だけではなく。多くの方の支えで一区切りできました。これからは、リハセンの発展と皆さまの活躍を陰ながら応援していきます。



M・S

昭和57年に脳研センターに採用となり22年、その後リハセンに15年勤務しました。まさか60歳まで働いているなんて30歳の自分は思いもしませんでした。まわりの方のみなさんのご協力のおかげです。

今まで、仕事や家事をどうやったら効率よく終わらせるかを優先して、自分中心で考えてきたように思います。

曾野綾子さんが『思い通りにいかないから人生は面白い』という本の中で、人生が満たされる条件は「人にも沢山与え、自分も沢山受けた」という実感が必要で、与える相手はお世話になっている近所の人や学校や社会にお返しすれば良いと言っています。

退職して少し余裕ができたなら、「他人の幸せを考える」ことをほんの少し頭において人生のもう3分の1を過ごしたいと思います。